

広島での「現代ギリシア語」と私  
(関本至先生との語らい)

『プロピレア』の第1号を発行するに当たり、さる11月16日に、『ギリシア語・文学研究会』の生みの親である関本至先生に、当地広島でどのような形で現代ギリシア語研究が根ざしてきたかをお聞きしました。

関本先生は、昭和17年に京都大学文学部言語学を修了された後、同大学教務嘱託を経て昭和19年、南満州鉄道株式会社の傍系の満鉄東亜経済調査局（以下、東亜経調）に勤務されました。京都大学では言語学プロパー、西洋古典語等の他、足利惇氏先生についてサンスクリットを学ばれ、またドラヴィダ語も研究されていたため、東亜経調の印度班に勤務されました。日比谷にあった東亜経調は、戦時中、玉川学園に疎開しており、時局柄、昼休みや帰宅途中の芋の買い出しが日課だったとのこと、当時のご研究がいかにか困難であったかが伺えます。戦後、東亜経調の膨大な資料が進駐軍に没収されるという形で東亜経調はその任務を終えることを余儀なくさせられました。関本先生は東亜経調の上司の紹介で昭和22年4月、天理語学専門学校（現天理大学）に赴任されました。この頃から、もともと道楽の様なものであった現代ギリシア語に次第にのめりこんでゆかれました。

その後、天理大学助教授を経て広島大学に赴任されたのは昭和27年11月の事でありました。この年（27年度）は、広島大学文学部言語学研究室が初めての卒業生を世に送り出した年でもあります。当時、広島大学文学部の歴史はまだ浅く、そのため京都大学の恩師泉井久之助先生から赴任せよとすすめられた時、東京文理科大学が東京教育大学に移行したことから当然広島文理科大学も教育大学であろうと考えられ、「広島教育大学へ行くのですか」と泉井先生に確かめられたところ、お叱りを受けたというエピソードが残っています。

言語学研究室では、言語学の他に古典ギリシア語を初めラテン語、ドラヴィダ語等を講義なさいました。昭和30年以降広島大学を退職されるまで数回、京都大学の松平千秋先生からのご依頼で、京都大学において現代ギリシア語の集中講義を行なわれました。この京都大学での集中講義がきっかけとなり広島大学でも現代ギリシア語の講義をなさるようになりました。第一回目の講義には、現広島大学文学部言語学助教授で当研究会副会長の古浦敏生先生が、学部3年生の時に出席されていたそうです。こ

のときの講義及び集中講義ノートと、長年に亘り収集された資料を土台として、昭和43年、今も現代ギリシア語を学ぶ学生の必読の書である『現代ギリシア語文法』が、大阪の泉屋書店から出版される事となりました。

この文法書に関してはギリシアでも、アテネ大学の言語学研究室の主任教授であったクルムーリス教授とテサロニキ大学のセタートス教授の書評があります。クルムーリス教授が手放して絶賛されているのに対して、セタートス教授の書評には、文法書の細部にわたり詳細な言及と訂正とが為されていました。この対照的な書評はそのまま両教授の性格を反映しているようで興味深いものであったと伺っています。また文法書に挙げられている例文の中に、広島に関するもの（p.84,164等、広島の被爆に関する一節）が含まれていますが、この点についてギリシアで評価されなかったのは残念であったとの事でした。

昭和32年当時、ギリシア人に接することは東京においてすら困難であったと思われませんが、さる方の紹介で、関本先生は広島の江波にあった宿舎に泊まっておられたギリシア人一等航海士のもとに一年余り通われました。（このときにテキストにしていたカラガーツィスの作品の中で、「雨の水」が『現代ギリシア短編小説選集』（溪水社、昭和55年）に載っています。）今日のように語学テープが普及していないこともあって、これが生きた現代ギリシア語に接した最初の経験だったと伺いました。また、資料収集の困難さは今日の想像の域を越えたものであっただろうと思われませんが、前述の泉屋書店が当時としては珍しくアテネと直接取引を行っていた事により、今日では人手でできなくなった多くの書籍を得ることができたということです。

関本先生が広島大学御在職中の終り頃、浮田三郎先生（当研究会会員・現広島大学教育学部助教授）が本格的に現代ギリシア語に取り組み、修士論文は現代ギリシア語についてのものを書かれたこと、また浮田先生の他、古浦先生、竹島俊之先生（当研究会会員・現広島大学総合科学部助教授）らと現代ギリシア語の小説の読書会をもたれたことなども伺いました。

現代ギリシア語関係の研究会を広島の地で、というお考えは、昭和51年、関本先生が広島大学を退官され広島文教女子大学教授に就任された頃、また丁度浮田先生がギリシア留学を終えて広島大学文学部言語学研究室の助手になられた頃から、温めておられたとのこと。浮田先生を広島文教女子大学に一時転出させられたのも、現代ギリシア語関係の雑誌を一緒に出版したいとの意図もあっての事と伺いました。それから数年を経て年号が平成に改まった本年、研究会の結成と研究会会誌の発行が実現する運びとなったことは、関本先生のご尽力と先生を囲む諸氏の協力によるものと言えましょう。そして現代ギリシア語研究がこの地に着実に根を下ろしたと言えるように思われます。

現在、関本先生は、昭和51年の御退官記念最終講義を論文にまとめられる作業の他に、『現代ギリシア短編小説選集』の第二集の出版に向けて原稿に手を加えておられ

ると伺っております。これからも関本先生がますますご健勝でいらしゃる事を心から祈念して筆をおきたいと思ひます。

（尚、この記事は、関本先生が退院されたお祝ひに先生のお宅に伺つた際に、お聞きしたお話の一部を運営委員の高橋りえこと近松明彦がまとめたものです。）